



Title	フランス語学科社会科学系卒論作製における動機づけの問題についての試論
Author(s)	和多, 則明
Citation	études françaises. 1995, 29, p. 69-93
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93708
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フランス語学科社会科学系卒論作製における 動機づけの問題についての試論

和 多 則 明

は じ め に

大阪外大の場合、卒業論文による単位認定は8単位であり、他の授業科目によって単位を代替できないという意味で特別な位置を占めている。その卒業論文（以下卒論と記す）を自ら進んで自発的に書いたと思われる学生は、これまでのフランス語学科の社会科学系卒論の場合、全体（240本）のうち5%あまりである。残りの95%あまりの学生は、卒論を書かなければ卒業できないという理由からやむをえず書いている。卒論を書くというのは、その意味で、制度的強制になっているが、これまでの経験では、学生の方から「なぜ卒論を書かなければいけないのか」という問いが出てくることはまれである。そこには、これまでの教育（学校教育および家庭教育）において、理由を問い返すことや理由を納得することなく従がわざるをえなかった学生達の歴史が示されているともいえよう。ただ、卒論反省会（卒論提出後ゼミで毎年実施）での学生の発言の例からみると、卒論を書くことに苦しんだ学生ほど、卒論作製の途中で、「どうして卒論を書かなければいけないのか」と自問するケースがあるようである。そこには人間が「問い」を持つときのひとつの原型があらわれているともいえるだろう。（たとえば旧約聖書の「ヨブ記」）学生が、その理由を納得せず、ただそうになっているから卒論を書くというあり方は、大学教育における卒論の位置を考えた場合、または、科学的文章表現としての卒論ということを考えた場合、必ずしも正しいあり方とはいえない。なぜなら、学生が自発的、

能動的、主体的、積極的に卒論を作るところに教育上の目的のひとつがあるとすれば、理由を納得せず強制されて書くということは、卒論を書くことの目的を否定しているからである。また、理由や原因を問うという行為なしに、学問や科学はなりたたないはずであり、理由や原因を問いそれらを理解するという姿勢と対立する行為を学生に強制することは、学問や科学を自ら否定することにつながるからである。

加えて、卒論を書くことの理由を学生が本当に納得した場合、学生が卒論を自発的に書くための動機づけを強めることになり、それは、卒論のレベルそのものを上げることにつながってくるだろう。

それらのことから、卒論を書く理由をはっきりさせることは、学生にとっても大学の教師にとっても重要な意味を持っていると考えられる。

(I) 自発的に卒論を書くための動機づけ

自発的に卒論を書くことが原則であるとすれば、理由についてあらためて説明するまでもなく、学生の方から書きたいと思い始め、卒論を書くというのが最も理想的なあり方である。(その意味ではこの節のタイトルそのものがおかしい。) 現実はそのような理想からははずれているが、理想的なあり方のときは、学生側の動機としては何が考えられるだろうか。問いを言いかえると、どのような場合に、学生は自発的に卒論を書こうとするかということになる。まず考えられるのは、卒論を書くこと自体がおもしろいときである。これは(学問・科学)自体が目的となるケースと考えられる。他のひとつは、卒論を書くこと自体は必ずしもおもしろくないが、別の目的のために、卒論を書くことの理由を学生が本当に納得した場合であろう。この場合には、卒論を書くことは、その目的のための手段となることになる。後者については次にあらためてまとめることにして、まず前者について考えてみる。前者のおもしろさとは何かということは、学問や科学のおもしろさとは何かということに等しい。学生がそれ以外のところ

でおもしろいと感じても卒論にはならない。たとえば、自己主張や達成感や優越感のおもしろさは卒論を科学や学問から遠ざけるケースがある。

学問や科学のおもしろさについては、次のように考えられる。

学問や科学のおもしろさとは、未知な現実や事実を自分の力で（頭で）、たしかなかたちで明らかにするおもしろさである。

明らかにしようとする「未知な現実や事実」というのは、研究テーマ（卒論のテーマ）である。「自分の力で（頭で）」というのは、他人からの情報や知識、他人の考え方をそのまま用いるのではないことを意味している。

「たしかなかたちで」ということにはふたつのことが含まれている。ひとつは、資料（史料）や統計データ（実験データ）がたしかに事実や現実を示していること、すなわちそれらの信頼度が高いことである。さらに、それらの資料（史料）や統計データ（実験データ）を誰でもたしかめようと思えばたしかめられることも条件として付け加える必要がある。したがって、誰かによって独占され、他の人にはたしかめることができない場合には、科学や学問としては扱えないことになる。もうひとつのことは、論理がたしかなことである。（論理とは、言葉または記号による、事実、現実、ものごとのつなげ方、関係づけ方、と定義する。）論理がたしかというのは、別の論理（関係づけ方）が成立せず、誰も反論できないことである。誰も反論できないというたしかさは、絶対的なものではない。というのは、「誰も」の中に今生きているすべての人間を含むことは、現実的には無理であり、また、将来の人類を含むことはできないからである。その論理を知っている人間には反論ができなくたしかなように思えても、現在の人類すべてにとって、将来の人類にとって反論ができないということを証明することはできないだろう。そのことは、科学的認識が絶対的なものではなく、相対的なものであることを意味している。

「明らかにする」というのは、謎をとくという表現もできよう。しかし、完全に未知でなくなるというよりは、以前よりは、といった方が事実合っているだろう。「以前よりは」というのは、そのテーマが含まれる学問や科学全体にとっていえる場合もあれば、そのテーマを明らかにしようとする人にとっていえる場合もあり、卒論の場合は、後者についてのみいえるケースが、そのほとんどを占める。しかし、知識として知っているのと、自分の力で明らかにすることは、はっきりと違っているから、すでに学問や科学全体としては明らかなことでも、学生自身が自分で明らかにすることは意味がある。また、知識量の拡大は、その知識が事実や現実をたしかに示していることが証明されていないときは、未知を明らかにすることにはならない。

それらのことから、先の学問や科学のおもしろさの定義を次のように詳しくすることができる。

学問や科学のおもしろさは、未知な事実や現実を、信頼度の高い資料（史料）や統計データ（実験データ）と、厳密な論理によって明らかにするおもしろさである。

上の定義の中で「未知な事実や現実を明らかにする」という部分は、科学や学問の目的をあらわし、研究テーマ（卒論のテーマ）にあたる。それに対して残りの部分は、方法を示していることになる。テーマについては、大学の制度上、規定にもとづいて制限できる合理的根拠がある場合（または、学生が納得できる証明ができる場合）をのぞいて、個人の思想、信条、信教の自由にまかされるべきであり、どのようなテーマをおもしろいと思うかは、学生の自由である。テーマにこそ、各学生の価値観、好み、興味関心などの個性がいかされるべきであろう。個人の価値観に関係する以上、他のすべての価値観と同じように、そのテーマがおかしいとか意味がない

ということについて科学的に証明することはできない。また、これまでの学問や科学が出している答が絶対正しいという証明は不可能であろう。ということは、人間の社会に存在するすべてのことが（規定による制限をのぞいて）テーマになりうるということになる。

しかし、テーマのおもしろさが卒論のおもしろさを決める条件なのではない。なぜなら、宗教的な方法によっても、小説家のようにフィクションとしても、そのテーマを明らかにすること（謎をとくこと）はできるからである。また、思いつきや、あてずっぽうによってもそのテーマを明らかにすることができる。だから、科学や学問を宗教や小説と分けるものは方法である。そのいみで、学問や科学のおもしろさを決めるのは、方法のおもしろさである。方法のおもしろさを別の言葉でいえば論証（実証を含む）のおもしろさであり、論証は、科学や学問の内容であると同時に、あるものが、科学や学問であるかないかを決める基準であろう。なぜなら、論証がなければ、その事実や現実の認識が正しいかどうかについて、他人が検討することはできないし、反論することもできない。したがって、人類の共同作業としての科学や学問は成立しないことになる。（論証は、万人に対して開かれているという意味では、科学における民主主義を支えている。たとえば、若き学生が、ノーベル賞学者の論証を批判することは可能である。）また、因果法則についていえば、その因果法則の成立が偶然の結果なのか、必然の結果なのかということについて、論証がなければ判断できない。たとえば、コインを10回投げてすべて表であったとき、論証がなければ、それもひとつの因果法則になりうる。なぜなら、次の10回も、その次の10回も、すべて表であるという偶然が無限回続く可能性を科学的に否定できないからである。論証はそれらの意味で、科学や学問にとって決定的基準である。ということは、それが事実や現実であるという論証のない知識の伝達や、記憶の強制は非科学的行為ということになる。（その是非について言っているのではない。）そのような行為を学生に対してすれば

するほど、学生の論証力の育成にとってマイナスであり、卒論を書く力を奪うという推論も建てられよう。(論証が、科学における民主主義を支えるのに対して、知識の所有量の差はそれを否定する。若い学生が、年長の教師の知識量をこえることはむづかしいからである。)

今までの学生の例をみると、学生はテーマのおもしろさにこだわる人が多い。しかし、どれほどテーマがおもしろくても、論証がおもしろくなければ、学問や科学のおもしろさとはならない。テーマも論証という方法もおもしろいというのが理想的ではあるが、しかし、どちらが大切か、どちらのおもしろさを選ぶべきかといえは、論証のおもしろさである。論証のおもしろさというのは別の言葉でいえば、はっきりとたしかなかたちでなるほどとわかるおもしろさである。そのようなおもしろさを感じれるかどうかは、人の好みや興味関心や価値観などさまざまな要因によって左右されるはずである。だから、論証をおもしろいと感じるはずだとか、感じるべきだという論証は不可能だろう。原則的にいえば、大学という組織は、論証がおもしろいと感じる人が集まるところであり、その方が、学問や科学を発展させる可能性がある。今までの経験では、学生の中で論証をおもしろいと思う人は全体の10%前後である。論証が中心となっているフランス映画の『裁きは終りぬ』や、アメリカ映画の『12人の怒れる男』をみておもしろいと感じる学生の割合は、それよりもふえるが、多数を占めることはない。そこに、日本の教育のあり方と、大学入試のあり方の結果をみることもできよう。それらがどうであろうと、大学入学後、学生達の中の、未開発の論証への興味やその能力を開発することもできるはずだが、筆者自身はその実験に成功していない。原因は、研究分野とその方法にもあるが、筆者自身が日本の教育の中で育ってきたということにもある。だから、筆者が大学時代に、近代経済学の日本における先駆者の一人であるある教師から価格理論について聞いたときの、眼がさめるような論証のおもしろさを学生に感じさせることができない。(このおもしろさの原因は、その

教師の説明の仕方にあると同時に、欧米人が作り出した近代経済学という学問体系と、それを支える数学的方法にあると考えられる。) 原則的にいえば、学生に対して論証のおもしろさを最大限示すことによって、卒論を書きたいと学生が思い始めることがのぞましいが、それが不十分にしかできないため、手段としての卒論の役割を述べることによって、動機づけをすることが必要となる。卒論にとって不可欠な論証ができるためには、論理力が必要であり、事実や現実に対して論理的なかわり方(あるときには理性的なかわり方)をする必要がある。逆にいえば、卒論を書くことによって形成されるのはそれらの力と姿勢であり、それらの力と姿勢が社会に出てからどのような役割を果しうるかという推論をのべることで、卒論への動機づけを行う必要がある。研究者になるのではない多数派の学生にとっては、社会に出てからのことの方が、興味をひく可能性があるということも、そのような方法をとるひとつの理由である。(なお、本論では具体例はあげていないが授業においては、論理力や推論力、先にのべたような姿勢があれば防げた可能性のある、現実には生じた事故、企業倒産例などをあげながら伝えている。)

(Ⅱ) 手段としての卒論を書くための動機づけ

(1) 人間が生きていく現実というのはたえず変化していくと仮定しよう。変化する現実には人間がそれに対応する仕方によってふたつに分けることができる。ひとつは、これまでの自分の知識や経験で処理できるものであり、他のひとつは、これまでの知識や経験によっては処理できないものである。後者についてはさらにふたつに分類できる。(a) 自分の知識や経験によっては処理できないが、他人の知識や経験によって処理できるもの、(b) 誰の知識や経験によっても処理できないもののふたつである。(a) については、処理の方法は他人の中にあるのだから、それを探し求めることで現実を処理できることになる。(b) については、一人ひとりの性格、

能力、経験が違ふと仮定するほど含まれる現実が多くなることになる。すなわち出会う現実が同じであっても、その処理の方法は個人によって違ふという個人主義的仮定である。(b)はそれぞれの人が、自分で処理せざるをえない「未知の現実」といえよう。この未知の現実の社会全体の量は、時代や、その社会が置かれた条件によって変化するだろう。日本の戦国期、幕末期、一般に戦争期、革命期など、社会の変化が大きい時期ほど、その量はふえる可能性がある。

未知の現実に出会ったとき人はどのような状況に置かれると仮定できるだろうか。おそらく、どのように行動していいかわからないという状況に置かれるだろう。(ただし、未知の現実を未知の現実と認識できない場合はのぞく。) どのように行動していいかわからないとき、行動を停止して行動方針が出るまで考えるだけの十分な時間がある場合もあれば、できるだけ早く行動を決定しなければ、自分にとっても他人にとってもマイナスの結果が生じる場合もある。後者になるほど行動決定はむづかしくなり、次の行動がとられる可能性がつよまる。すなわち、不安、心配、恐怖の感情にとらわれたパニック的行動である。感情の動きと、それまでの知識・経験の複合が行動の決定要因となるだろう。未知な現実がその人にとって、危険な結果をもたらす可能性があるほどこの行動の可能性が出てくる。この行動が必ず失敗するとは限らない。感情の動きのベクトルと偶然の重なりによっては成功することもありうる。他方、行動そのものが未知な現実の危険度を増加させることもありえよう。行動決定の条件が前者に近づくか、または、後者であっても理性的意志によって感情を抑制する場合には、未知な現実そのものを科学的に分析する方法が成立することになる。その場合、まず必要なことは、未知な現実についてのたしかな情報を集めることである。現実についてのたしかな情報の中には、感覚によってとらえられる直接的情報が含まれるから、それをとらえるためには観察力または感受性は鋭いほど良く、無限定的である方が良いことになる。(無限定とい

うのは感覚の志向性がないこと、すなわち子供の感受性に近いということである。未知な現実であるから無限定の方が良い。直接的情報ではなく間接的信息については、それがたしかなものであるかそうでないかを検討できる情報批判力が必要である。その力がなければ、うわさやデマにふりまわされることになるだろう。情報批判力によってはじめてたしかな間接的信息が集められることになる。

集められた情報は未整理のまま眼の前に積まれているか、頭の中につめこまれているだけである。(未知の現実だから未整理となる。)次に必要なことは、それらの情報の整理である。整理するとは、同じグループに属すると思われるものを集め、違ったグループと区別し、グループ間の関係づけを行うことである。この分類(分析)と関係づけ(総合)は、相互循環的に行なわれるはずである。なぜなら、未知の現実であるということは、分ける基準そのものが未知であることを意味するからである。この整理のプロセスには、ものごとを関係づける力、すなわち論理力が不可欠である。行動との関係でいえば、整理することは、行動を容易にするための前提条件を作ることと位置づけられ、論理力はその前提条件を作る力となる。未知な現実であるから、感受性と同じく、論理力も無限定の方がいいということになる。すなわち、過去の経験や知識に左右されない自由な論理力(関係づけ方)である方がいいということになる。そしてこの自由な感受性と自由な論理力は、その自由さゆえに、次節でのべるような技術革新を支える力ともなるはずである。

未知の現実に直面して処理する方法というのは、他人からの借り物としての知識を寄せ集めるのではなく、原資料や原データ(ということは、未整理であるということに近い)から卒論をまとめるときのパターンと類似点が多い。違う点は、後者の方が、感受性の果す役割が少いということと、整理する時間が多いことである。また、行動や認識を誤った場合にもたらされる結果の重大性は、前者の方が卒論の場合よりも大きくなる可能

性があるということである。現実における場合を考えるなら、卒論にかける時間が長い方がいいとはいえず、逆に、短時間の方が実践的訓練となる。実際、短時間でもすぐれた卒論を書いた学生の例がある。

現実を科学的に分析する方法の特徴は、その方法のたしかさにある。それは行動のたしかさを生むと同時に、次の行動のたしかさを生み出す。なぜなら、分析の仕方がたしかであるほど、失敗したときにも成功したときにも、なぜ失敗したか、なぜ成功したかの検討がしやすいゆえに次の行動のたしかさにつながるからである。その意味でこの行動の方法というのは、個人においても、民族において累積的であろう。それに対して、感情のベクトルと偶然の重なりで失敗したり成功したりする場合には、累積的ではありえない。失敗と成功は、その原因をとらえることができないのだから、次の行動にいかされない。しかも、偶然という原因をもとらえることができないのだから、すべて自分の力によるという成功の自信やおごりを生みやすいだろう。その意味では、西洋においては、現実の中でのたしかな行動の方法が、その累積的效果として近代科学を生み出してきたという仮説をたてることができよう。この仮説に従えば、未知で危険な現実を、先のたしかな方法によって生きぬいてきた個人や民族ほど、科学的認識力のレベルは高いことになる。

科学的な方法は、方法のたしかさにあるのだから、未知の現実の中でたしかな結果を手に入れたと思う人や民族ほどこの方法を必要とすることになると考えられる。未知の現実の中での行動の結果については、それが自分にだけ関係する場合と、自分以外の他人にも関係する場合がある。後者の場合は、他人への責任感、罪責感、恥の感覚などが、この方法のたしかさを求めさせることになるだろう。未知の現実に対する自分の行動が失敗した場合、数的に多くの人達にマイナスの結果を及ぼす危険性の認識（これは次にのべる推論力による）があり、かつ、その結果への責任感が強い、個人の責任が問われる場合、自分の行動の決定基盤そのものを問いな

おさねばならなくなるだろう。数的には多くなくて、ただ一人であろうと、結果が重大であるという認識があり、かつ、責任感が強くなるほど同じことになる。（例えば親として子に対する関係がそうである。）そのように考えるならば、自分の行動の結果が多くの他人の人生を左右するような社会的地位につく可能性がある若い人達（経営者、医師、弁護士、裁判官、教師、政治家、公務員、など）に対して、行動のための科学的方法と、行動の結果についての科学的認識力を与えない教育は、自分の行動に責任をとれないエリート達を大量生産することになるだろう。（ここで「責任をとる」とは、推論力によるマイナスの結果の防止と、失敗を将来に生かすことである。）

先にのべた科学的方法は、現実をとらえる方法であるが、行動というものは未来の現実に対してなされる。そのいみで、未来という未知の現実をどうとらえるかということも、行動を決定する上で重要であろう。未来をどうとらえるかは、ひとつに推論力に依存する。推論力というのは、感覚ではとらえられないことを論理の連鎖によってとらえる力であり、論理力なしにはなりたたない。そして推論力というのは、科学や学問、卒論を支える力でもある。したがって、推論力が現実を生きていくうえでどういう役割を果しうるかという推論も、学生の卒論への動機づけとして役立つことになる。

（２）感覚というものが、人間の認識能力としてどういう特徴を持っているかということを考えるとき、感覚が眼の前の現実をとらえることに特徴があるという仮説がたてられる。眼の前の現実には強く結びついていると言ってもいいし、眼の前の現実にはばられていると言ってもいいだろう。

（ただし、予感については除く。）感情というものが、人間の認識においてどのような役割を果すかということについては、簡単にはいえないが、ひとつ建てられる仮説は、過去の経験と強く結びついているという仮説で

あり、この仮説は、感情が後天的に形成されるという仮説に等しい。それらの仮説を前提として考えると、感覚や感情を中心に、現実や事実をとらえようとする場合は、現在のことや過去のことにはばられるかたちで現実や事実をとらえるという結論を出せることになる。それらと比較すると、推論力というのは、現在や過去の経験をとらえられないものをとらえるときやそれらをのりこえようとするときに不可欠のものとして位置づけることができる。なぜなら、推論力のレベルが上るにつれて、現在の感覚的認識や過去の経験とそれにつながる感情は、さまざまなケースのなかのひとつになるからである。（想像力、すなわち具体的イメージを伴ったものについては、卒論と直接的には関係しないことと、過去の経験との関係が不明であることから扱わない。）だから、感覚や感情によってはとらえられないが、現実の中を生きていく上で推論力が必要となる例をあげれば、すべて卒論への動機づけになることになる。

まず、先の節で述べたこととの関係でいえば、推論力がないほど、行動が認識上のたしかさを持たないことになる。行動は現在から未来に向けてなされる。それを支える認識上のたしかさというのは、現状の科学的分析と、それにもとづく未来についてのたしかな推論である。その両者が欠けることになるのだから、行動は現在についての感覚的認識と過去の経験と感情に左右されることになる。それらが、未来についても偶然あてはまるときはいいが、未来とのズレが大きくなるほど、その人や民族の行動は非現実的となり、ある場合には、妄想的行動ともなるだろう。たとえば、石油ショック時のトイレットペーパーパニックなどはそのひとつの例になるだろう。（そのいみでは、第2次大戦時の日本人の行動の科学的分析は教育者に貴重な教訓と教育的課題を与える可能性がある。）環境問題についても同じことがいえよう。現在の行動が、10年先、20年先にどのような環境問題をひきおこすかを考えるためには、現状についての科学的分析力とたしかな推論力が必要である。また、推論にもとづいて現在の欲求や感情

をコントロールするためには、理性的意志が必要である。ということは、感覚や感情が行動を支えているときには、環境問題について、現実的に考えることも、現実的な行動をとることもむつかしくなるということである。

過去もまた、感覚でとらえることができない部分を持っている。一次史料を除けば、過去をとらえるために、推論力は不可欠である。過去が、現在生きている人々にとって経験的事実である場合には、その過去に対して、経験と感情がより強く働くことになる。感覚と感情が人々の認識を支えているときには、推論力によって過去を分析することが困難になる。そのことは、過去から科学的に学ぶことを不可能にする。なぜなら、過去から学ぶためには、過去の失敗について、なぜ失敗したのかという原因や、同じ失敗をくりかえさないためにどういう方法をとればいいのかを、過去の現実こそくして明らかにすることが必要だからである。たとえば、国民の死者数とその死の姿が、政治家の政策や軍人の軍事戦略の失敗を測るものであるとすれば、第2次世界大戦においての日本は失敗した可能性がある。その失敗の原因が、その当時の政治体制や政治的指導者達にだけに帰せるものなのか、それともより多くの日本人が共有する現実分析力や推論力の欠如に帰せるものなのか、その失敗の原因は、戦後において克服されているのかどうか、それらを明らかにせずに、反戦論を語っても、大東亜戦争擁護論を語っても、過去の経験と感情の表現にすぎないから、過去の経験と感情がうすければ、同じような失敗をくりかえす可能性がある。(原則的にいえば、第二次大戦で死んだ一人ひとりの兵士、市民について、その死が防ぎようのないやむをえない死であったのか、それとも、事実認識力や推論力があれば防げたのかということを明らかにする必要がある。その作業は政治的立場をとわず重要な意味をもつだろう。なぜなら、その分析は、分析をする人間の事実認識力と推論力のレベルを挙げる可能性があるからである。)

推論力によって、過去の経験を分析することができないことは、過去を

相対化できないということであり、過去を絶対化する可能性があるということである。たとえば個人のレベルでいえば、過去に自動車事故をおこさなかったとき、その原因が偶然にあるのか、自分の運転技術にあるのかを分析しなければ、過去の経験を絶対化し、（すなわち自分の運転技術に自信を持ち、）将来に対しても楽観的になる可能性がある。偶然を考えることができれば、自分も事故をおこした可能性があることに気がつくことで、過去は相対化される。自分が生きてきた過去以外のありうる過去を考えるのは推論力によっている。（逆に、過去の経験から将来に対して悲観的になる場合も同じである。）過去の原因について科学的に証明されていないときで、（自分の運転技術によるのか偶然によるのか証明されていないときで、）かつ、将来もその原因が有効であるという証明ができないときには、将来の楽観的状況も、悲観的状況も、確率的には $\frac{1}{2}$ ずつである。別の例としては、これまで成長を続けてきた会社が、その原因を明らかにしていないとき、原因が有効でなくなっても過去の経営方法を続けて倒産するというケースが考えられる。人間がどういうときに原因を考えるかということについて推論をたてるなら、成長を続けてきた会社ほど原因については考えておらず、危機をのりこえてきた会社ほど原因について考えている可能性があることになり、このケースは現実的でありうる。これまでの経営方法が続ければ倒産の可能性があるとき、過去の経営方法を絶対化したり、愛着という感情が強いほど、新しい経営方法に対しては、「理屈ではわかるが感情では納得できない」という言葉や行動が返される可能性がある。そのような反応が多数を占めるときには、その会社は倒産せざるをえないだろう。このケースは、「感情的であること」を定義するためには、いい例となる。「感情的であること」とは、「論理や事実認識の重要性を知らないために、最終的には、感情が行動の決定要因となること」である。「最終的に」という言葉を入れたのは、どれほど激しい感情を持っていて、感情的に思える言動があっても、結論的には論理や事実認識を受入

れる場合を感情的とはよべないと思われるからである。会社だけではなく、個人についても、ある民族についても、論理や事実認識が正しいにもかかわらず、それに反する感情を持ち、しかも感情的な場合には、偶然にめぐまれなければ、自分の感情によって自滅する可能性があることになる。逆に、論理や事実認識がどれほど正しく、感情的でなくても（理性的であっても）、偶然にめぐまれないならば失敗することになる。その意味では、「神風論」は必ずしも間違っているわけではない。しかし、科学的認識というのは、偶然の中に隠された必然を論理的に明らかにすることにあると思われる。とすれば、科学的認識力が勝敗を決めるような場合には、感情的な生き方と「神風論」のような偶然にたよった生き方は失敗することになるだろう。そのように考えるならば、第2次大戦中における日本人の行動と原爆投下による戦争の終結は、日本人にとってかけがえのない教訓となるだろう。その教訓が戦後の教育（および現在の教育）の中にどれくらいいかされているかということは、今後の日本についての推論をたてるうえでの重要な根拠となるはずである。

次に、感覚や感情にだけたよっていたのではとらえられないものとして、人の心の中や社会全体のメカニズムがあげられる。それらをとらえるためには、推論力が不可欠である。推論力がない場合には、感覚でとらえた相手についての情報をもとに、自分の経験や感情を移入することによって人の心の中を理解したことになる。しかし、相手の経験や感情のあり方が、自分と違っているほど、この方法は誤解や対立を生み出しやすい。違っている場合には、人間の経験や感情のさまざまなあり方を考える（推論をたてる）必要がある。さまざまなあり方を考えることによって、自分の経験や感情は相対化されることになる。自分の経験や感情が相対化されることは、自分とは違った他人の経験や感情（個性）を自分と対等なものとして認めるための不可欠の条件であり、この論文の最後に述べる対話力の基礎を作るだろう。なぜなら、自分の感情や経験が絶対化されている場合には、

自分のそれらが唯一のものであるわけだから、自分とは違った経験や感情のあり方は、存在しえない（存在するべきではない）ことになる。したがって、他人の感情や経験のあり方が自分のそれらと対立したときには、徹底した攻撃か他人の排除の可能性が出てくることになる。したがって、対話は当然なりたたなくなる。そのように考えてくるならば、他人の人権の尊重という価値目的にとっては、推論力が不可欠であることがわかる。（推論力だけで十分なわけではない。）外大生が、他人の人権を尊重する欧米人達の中で国際人として生きていく必要があるとすれば、推論力は不可欠ということになり、卒論の作製が、その作製の仕方によっては推論力のレベルを上げることに役立つとすれば、そのことについての説明は、外大生にとっての卒論の動機づけとなるだろう。

社会全体のメカニズムをとらえるということは、経済学などの学問にとっての目的にあたるだけではない。ある社会の構成員が自発的に社会生活のルールや法律を作りそれを維持していくためには、推論力によって社会全体のメカニズムをとらえることが不可欠である。なぜなら、自分にとっての眼の前の直接的利益の追求（＋）が社会全体においてどういうマイナスをもたらし、それが長期的には自分にとってどういうマイナスをもたらし、総計としてプラスなのかマイナスなのかを考えるということは、社会全体のメカニズムをとらえることであり、推論力に依存しているからである。その意味で、民主主義社会が、民主主義社会として成立するためには、構成員の推論力のレベルの高さは重要な条件のひとつであり、教育がそのことにどれだけ貢献しているかは、民主主義社会の将来を決めるという仮説をたてることができよう。愛国心についても同じだろう。個人の価値と感情の多様化と、その多様化が日本の技術革新力と密接な関係を持っており、しかも日本人の国際化が必要とされる条件において、感情に訴えることによって、画一的感情としての愛国心を作りあげようとすることは、必ずしも現実的とはいえないだろう。むしろ、国家的利益と個人の利益を

はっきりとつなげることのできる推論力を教育によって作りあげることの方が現実的だと思われる。

次に、推論力がなければ、自分の感覚的認識の誤り（聞きちがい、見まちがい、錯覚、幻覚）に気がつかず修正できないということがある。一般的にいえば、感覚は感覚を疑うことができないという仮説になる。疑えるのは、誤りの可能性を考える推論力によっている。推論力がなければ、自分の感覚的認識を絶対化することになる。眼の前にあるものの感覚的認識を絶対化するということは、別の言い方をすれば、その感覚的認識からはなれられない、すなわちそれにしばられるということである。ということとは、自分が生きてきた経験的現実（＝感覚的現実）とは違うことほど考えられない（認識できない）ということにはかならない。古典的例では、地動説と天動説の問題がある。憶えた知識ではなく、人間が日常で持つ感覚的認識に基づけば、地動説は現実的認識とはなりえない。地動説が現実的認識となりえるためには、推論力が不可欠である。推論力があれば、その証拠を示すことはできなくても、ふたつの可能性は等価であることを考えることができる。ブラックホールも、数字における虚数や無限大・小も同じ例だろう。神の問題もまた同じである。たとえば、「小説の中の登場人物が小説家の頭の中の想像の産物であるように、人間と人間が生きている現実、神の頭の中の想像の産物である。」この仮説の正しさを科学的に証明することはできないが、論理としては（推論としては）否定できない。否定の証明はできない。ということ、その可能性がありうるということである。だから、何十年か先、何百年か先の人類が、その仮説が科学的に正しいことを証明する可能性も残されている。自分が生きている感覚的現実を絶対化しているほど、この仮説を馬鹿馬鹿しいものとして一笑に付す可能性がある。したがって、この仮説は、その人の科学的認識力（推論力）を測るリトマス紙でもある。（神という感覚ではとらえにくい存在を論理力によってとらえようとしたデカルトのような欧米人の試み

は、その試み自体が推論力によって支えられていると同時に、欧米人の推論力のレベルを高めてきた可能性がある。)

技術革新についても、同じことがいえるだろう。すでに実現されている技術と比較して違っていればいるほどその技術革新が根本的な技術革新であるとすれば、そのような根本的技術革新は、現実の感覚的認識にしばられているほど生れないという仮説がたてられる。推論力がなくても、現実の技術の延長線上にある（現実の技術と連続的な）派生的技術革新を生み出すことはできるが、別の線上にある根本的技術革新であるほど、現実の感覚にしばられない推論力が必要とされるだろう。そして、先の神の問題と同じように、そのような根本的技術革新は馬鹿にした笑いで拒否される可能性がある。だとすれば、日本の教育が若い人達の推論力のレベルをどれだけ上げられるかは、将来の日本の技術革新のあり方と、日本商品の国際競争力を左右することになるだろう。

以上のべてきたように、推論力は、感覚や感情が過去の経験を絶対化するのに対し、相対化する役割を果たすことができる。だから、親、家庭、学校教育によって作られたパターン化された認識や行動も、推論力がなければ、変えることがむづかしくなる可能性がある。たとえば、親からしつけられたあいさつ、礼儀などの社会的慣習が絶対化されているということは、それらが条件反射的行動になっている可能性があるということの意味する。条件が現実にあてはまらないときには、非現実な行動となる。したがって社会的慣習にばらつきが出てくるほど、非現実的な条件反射的行動は多くなり、また、社会的慣習をめぐる対立が多くなることになる。条件反射的行動が絶対化されているほど、その行動を共有していない相手は、非常識な人、礼儀を欠く人として批判されるか、差別の対象となりうる。日本人とは違った社会的慣習を持つ外国人とつきあう可能性がある外大生の場合、自分の条件反射的行動が絶対化されているほど、外国人とつきあうことができなくなる可能性が出てくるだろう。条件反射的行動は、その形

成が乳幼児期にあるほど変えにくいと思われるが、もし変えられるとすれば、その前提条件となるのは、自分の条件反射的行動の相対化であるだろう。相対化を生じさせるひとつの原因は、他人からの批判などを含む条件反射的行動の失敗である。しかし、批判や失敗は必ずしも相対化にはつながらない。批判や失敗が相手への攻撃のきっかけとなる可能性もあるからである。失敗の原因を考えたとき（そのためには推論力が必要である）で、しかも、おたがいの条件反射的行動を条件反射的なものととらえたとき初めて相対化が可能になる。おそらく、条件反射的行動は異文化間の接触が対立や差別におわるか、お互いの理解と連帯への糸口となるかを決める重要な分れめになる可能性がある。それを決めるのは、お互いの推論力と、理性的意志にもとづく条件反射的行動のコントロールであろう。（異文化間の接触だけではなく、日本人間の結婚などについても同じことがあてはまるだろう。）

条件反射的行動の相対化がすすめば、そのことが今度は、その人の推論力のレベルそのものを上げてくる可能性がある。なぜなら、条件反射は行動の面だけではなく、認識の面や考え方の面についてもいえるからであり、認識や考え方における条件反射的一面性のとらえなおしは、推論の多様性につながるからである。（推論力のレベルは推論の多様性と厳密さで測ることができよう。）そして、推論の多様性は、技術革新を支える独創性の一部分に位置づけることができる。他人の考えられない推論（または仮説）を考えられるかどうかは、科学や技術の独創性を決めるひとつの重要な要因だろう。したがって、条件反射的行動や認識をどう変えられるかは、国際人の形成の問題であると同時に、技術革新を生み出せる人材形成の問題であることになる。

一人ひとりの個人的問題として考えると、条件反射的行動や認識を変えることは、自分の過去からの解放の問題であるとともに、親や家庭からの自立の問題でもある。人は、自分で選ぶわけではなく偶然によってある親

の下、ある家庭、ある国、に生まれる。偶然によって形成される条件反射的行動や認識が自分の可能性を本当の伸ばし、本当の幸福をもたらしているかは、条件反射的認識や行動を絶対化している限りはわからない。自分とは違った他人の過去と現在、自分自身の過去と現在を比較分析することで、自分の条件反射的行動と認識が相対化され始めるとき、自分にとっての別の人生の可能性が選択肢に入ってくることになる。いくつかの選択肢の中から、自分の育った過去を選びなおすことは、自分の育った過去を絶対化することでそれに支配される生き方とは違っている。違わせているのはその人の「自由さ」である。そしてその「自由さ」はその人に、環境への適応力を与えることになるだろう。なぜなら条件反射的認識や行動における条件が現実的にあてはまらなくなればなるほど、その人は現実への適応力を失って旧い環境と運命をともにせざるをえないからである。日本にとって、外国からの知識の受身的吸収が日本の歴史そのものによって形成された条件反射的認識および行動になっており、将来においては、日本人による科学技術の創造が環境への適応の条件になるとすれば、前者から後者への転換は、明治維新における転換よりも困難である可能性がある。条件反射的認識と行動を変えられなければ、今のべたことと同じことが日本人と日本についてもいえる可能性があるだろう。そうなるかどうかは、ひとつに、教育が若い世代にどれだけの推論力と理性的意志力を与えうるかにかかっているといえよう。他のひとつは、若い世代の親が、条件反射的認識や行動を、しつけなどのかたちでどれだけ強制するかである。親がしつけを強制する原因としては、親自身の経験と感情を絶対化することによって推論力をなくしていることが考えられる。なぜなら子供が成人した時代の時代的变化や、しつけが子供の可能性に及ぼすマイナスの影響について推論をたてるほど、しつけという条件反射的行動を強制できなくなるからである。そして、しつけについて知りながらも、時、場合、人によって変えることのできる力、すなわち、人間に対する現実的認識力、推論力、

理性的意志力の大切さに気づくことになるだろう。それとともに、他人と理解しあうための対話力が不可欠ということにも気付くだろう。なぜなら、条件反射的な行動や認識が他人と対立したとき、対立のまま終らせるか相互理解の糸口になるかは、推論力ともに対話力に依存するからである。

卒論を作製することによってつちかわれる力が、対話力のレベルを上げることに役立つことを説明することは、学生達にとってはこれまでの例以上に卒論への動機づけとして役立つと思われる。なぜなら、学生達のほとんどにとっては、現実の中を生きることの内容の重要な部分を対人関係が占めると思われるからである。

(3) 人との対話において、相手から伝わってくる直接的情報というのは、言葉の意味と語調だけではなく、顔の表情および視線、体全体の動き、着ている物、髪型、持っているものなど、より広範囲に及んでいる。しかも、言葉の意味、語調、表情、体の動きなどは、ビデオなどで記録しなければ、瞬間的に変化し、同じものに二度出会うことはない。瞬間的に変化するそれらの情報を正確にキャッチするには、書物や資料や統計データの情報をキャッチするよりも鋭い観察力や感受性が必要とされることになる。それらの情報のキャッチが、自分や他人の生命を左右するような場合ほど、それらの鋭さが求められる可能性がある。しかし、科学や学問そのものによってそれらの認識能力を開発したり訓練することは困難である。なぜなら、科学や学問の内容と方法は、論証にあるからである。しかし、科学や学問にそれらの能力が無関係なわけではない。なぜなら、それらの能力の高まりは、自然科学の場合は、自然そのものおよび実験の観察能力をあげるからである。人間や社会についての学問や科学の場合には、現実を参考情報とするために役立つ。(ただし、書物や資料や統計データの中にのみ学問や科学があるという立場に立てば、それらの能力は必要ないことになる。)そして、自然そのものの観察や、人間や社会の現実の観察は、

仮説を思いつくために重要な役割を果す可能性がある。そのような位置づけをするならば、感受性や観察力のレベルを上げる訓練は、現実を生きる場合や、対話の場合だけでなく、科学や学問にとっても無視できないことになる。

感受性のレベルに応じて、相手から手に入れる情報量は変化する。鋭い人は、多くの情報を手に入れ、鈍い人は、少い情報にとどまるか、ある場合にはほとんど手に入れないことになる。手に入れたその情報をどう処理するかのプロセスは(Ⅱ)―(1)で述べたことと同じである。ただ、対話の場合は、目的は行動方針の決定というよりは、相手を相手にそくして理解することになるだろう。(相手＝事実または現実といいかえれば、相手を相手にそくして理解するということは、事実を事実にとくして理解すること＝科学的認識となる。すなわち、対話の中にすでに科学的認識があることになる。)情報の処理においては、相手からの情報に自分の経験や感情を移入する方法がとられる場合がある。たとえば、自分が失恋して長い髪を切った経験がある場合、相手の同じ行為の理由も同じと考えるケースである。相手が、自分とは違った経験や感情を持っているほど、この方法は失敗する。感情の部分では共通性がないのだから、言葉の意味を中心とした対話すなわち論理的な対話と、相手の心の中への推論が重要となる。経験や感情のあり方が違えば、価値観や利害や考え方も違ってくる可能性がある。それらが同じか似ていれば、対話は成立しやすいわけであり、対話する力はそれほど必要としない。そのいみで、「気の合った」仲間や「肌が合う」仲間との対話は、対話力の訓練にはならないことになる。経験や感情などが違うほど、相手は自分にとっては、「未知の現実」となるわけであり、相手に対する観察力とともに、論理的な対話力や推論力が求められることになる。それらがなければ、感情その他が違うわけだから、対話は成立せず、感情的対立のままその関係は終るか、ある場合には暴力的行為(内戦を含む戦争)に致ることになるだろう。感情的に対立する可能性

が強いということは、それだけ双方に、理性による感情の抑制が求められることを意味している。したがって、対話力の中には、論理力、推論力のほかに理性的意志力が含まれることになる。

感情などが違っている相手が何かを自分に向けて言った時を、出発点にとるとその後の対話のプロセスは次のようになるだろう。まず相手の言っていることを正確に聞き、理解する。ところが、この単純な行為がそれほど容易ではない。これまでのゼミでの経験では、相手の言っていることを正確に聞くのではなく、自分の方の解釈か自分がすでに持っていた考えでおきかえているケースがしばしばみられる。また、相手の言っていることを正確に理解するためには、聞き返すことが必要になる場合がある。相手の言葉や会話文がいくつかに解釈される場合がそうである。いくつかに解釈されるということが気がつくのは、これまでの経験的知識か推論力によっている。それらがなければ、聞き返さず、その結果、自分の解釈＝相手の言っていることと、絶対化されることになる。等号が成り立つときもあるが、等号が成り立っていないときには、誤解の上に立って自分の方の言葉が出ることになり、対話が成立しにくくなるか、感情的対立の場合と同じ結果になる。原因は、推論力の不足による解釈の絶対化にある。これまでのゼミでの討論の経験では聞き返すことはほとんどみられない。

一応、相手の言っていることを正確に理解したとしよう。相手の言っていることが、自分の考えと一致しないときや自分の考えを否定しているときには、自分の中で、相手の考えと自分の考えをともに検討する作業が必要となる。相手の発言をきっかけにして自分の中での内なる対話が始まるといってもよい。この内なる対話というのは、感情を伴わないわけではないが、基本的には考えるというプロセスであり、推論を含んだ論理的プロセスであり、対話の進行と同時に成される場合もありうる。また、このプロセスは、それまでの自分の考えを疑い、批判的に検討したり反省するプロセスを含んでいる。だから、自分の考えの正しさに自信を持っている人

(場合)ほど、何かの考えや価値観を信じている人(場合)ほど(宗教やイデオロギーを含む)、自分の欲求や感情が条件反射的なものになっている人(場合)ほど、この内なる対話は成立せず、したがって、相手との対話も成立しなくなる。それらの場合、反応として返されるのは、相手の発言の即時的な否定か非難である。なぜなら、上の内なる対話のプロセスが考えるということである以上、即時的な答は出にくいからである。

他方、対話であるから、自分の内面だけではなく相手の内面でもこのプロセスが成立しなければ、対話は成立しないことになる。両方の内面でこのプロセスが成立した場合、相互に相手の考え方や感じ方についての疑問や批判を出しあい、おたがいがおたがいの考え方や感じ方を変えていくことになり、そのプロセス全体が対話ということになる。そのような対話は、それぞれが相手の価値観や考え方や欲求のあり方をより深く理解するという結果をもたらすと同時に、それらを変えていくといういみでは、おたがいがそれまでの自分からとき放たれより自由になるという結果をもたらす。事実認識や科学的認識という面では、上のような対話は、事実や事実の認識の正しさ、広がり、深まりをもたらすことになる。それらの結果がもたらされる条件は、一人ひとりの人間の違い(多様性)と一人ひとりの対話力である。人間の自由や、科学的認識を価値目的とした場合には、(ただしそうするかどうかは個人の自由である)個人の多様性を許し、しかも一人ひとりが対話力を持っている社会や国家の方が、そうでない社会や国家よりはすぐれている、というのは筆者の価値判断ではなく、事実についての推論的結論ということになる。

上にのべたプロセスの最終的結果までは必要でなくても、おたがいの妥協点をみつけるためにも上のプロセスを含んだ対話力が必要とされるだろう。その対話力を支えるものをもう一度まとめると、鋭い感受性(観察力)、感情を抑制できる理性的意志、推論力を含む論理力、自己反省力(自己批判力)である。それらの力は、科学や学問の研究に必要な力と同じであり、

自分の力で卒論をまとめるときに必要な力と同じである。逆にいえば、書物だけにたよるのではなく、また、他人の知識を無批判に借りるのではないかたちで卒論をまとめることは、対話力を完全にではないにしろ養うことに役立つということである。(対話力を養うためにより良い方法は、ゼミで、持っている知識に依存した討論ではなく、学生がそれぞれの経験のところで参加できるテーマによる討論をすることである。たとえば、日本の教育、大学の授業のあり方、バイクの危険性と安全性といったテーマである。それらのテーマにおける討論では、知識量における教師と学生の差は少なくなり、教師も対等な場所に立たされるから、教師の方の論理力や対話力もためされることになる。そのような討論をやってみると、学生の論理力の高さや、授業科目の成績と論理力は必ずしも正比例しないということも教えられる。ただ、この討論方式の授業は、学生には必ずしも評判が良くない。面白いが、勉強をした気がしない、知性の香りに欠けるといった感想が主である。そこには、日本の教育における「学ぶ」ということのあり方、「知性」というもののとらえ方があらわれている可能性がある。)

外国人が、感じ方、価値観、考え方において違っていることがあるという前提に立てば、外大生が上にのべたような対話力を持つことは、外大生が国際人になっていくためには欠かせないという推論がたてられる。だとすれば、国際人のための条件は、実用的外国語力にだけあるのではないことになる。先の三つの力に支えられた対話力がもうひとつの条件であり、それに役立つのが、自分の力で卒論を書くことである。と結ぶかたちで、学生が卒論を書く理由を説明しているが、その説明がどれだけ学生達の動機づけになっているかは、今のところ不明である。